

第 57 回 SGRA フォーラム（概要）
第 2 回「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」円卓会議
「蒙古襲来と 13 世紀モンゴル帝国のグローバル化」

日 時： 2017 年 8 月 7 日（月）、8 日（火）、9 日（水）、10 日（木）

会 場： 北九州国際会議場国際会議室 他

主 催： 渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

協 賛： 北九州市/（公財）北九州観光コンベンション協会

協 力： 鹿島学術振興財団

■フォーラムの趣旨：

東アジアにおいては「歴史和解」の問題は依然大きな課題として残されている。講和条約や共同声明によって国家間の和解が法的に成立しても、国民レベルの和解が進まないため、真の国家間の和解は覚束ない。歴史家は歴史和解にどのような貢献ができるのだろうか。

渥美国際交流財団は 2015 年 7 月に第 49 回 SGRA(関口グローバル研究会)フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、先ず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる智慧を東アジアに供給することの意義を確認した。このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは 2016 年 9 月のアジア未来会議の機会に開催された第 1 回「国史たちの対話」であった。いままで 3 カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、先ず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生（東京大学名誉教授）、葛兆光先生（復旦大学教授）、趙珖先生（高麗大学名誉教授）の講演により、3 カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第 2 回対話は自国史と他国史との関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と 13 世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。13 世紀前半の「蒙古襲来」を各国の「国史」の中で議論する場合、日本では日本文化の独立の視点が強調され、中国では蒙古（元朝）を「自国史」と見なしながら、蒙古襲来は、蒙古と日本と高麗という中国の外部で起こった出来事として扱われる。しかし、東アジア全体の視野で見れば、蒙元の高麗・日本の侵略は、文化的には各国の自我意識を喚起し、政治的には中国中心の華夷秩序の変調を象徴する出来事であった。「国史」と東アジア国際関係史の接点に今まで意識されてこなかった新たな歴史像があるのではないかと期待される。

もちろん、本会議は立場によってさまざまな歴史があることを確認することが目的であり、「対話」によって何等かの合意を得ることが目的ではない。

なお、円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳をつける。円卓会議の講演録は、SGRA レポートして 3 各国語で発行する。また、関係資料はホームページで公開する。

<http://www.aisf.or.jp/sgra/research/kokushi/>

■プログラム：

○8 月 7 日（月）午後 4 時～7 時 開会と基調講演

趣旨説明（三谷博）（10 分）

基調講演（葛兆光）（30 分）

『ポストモンゴル時代』？—14～15 世紀の東アジア史を見直す

参加者の自己紹介

○8 月 8 日（火）全日円卓会議（午前 9 時～午後 6 時）

各セッションは 100 分で、3 名の研究発表（各 20 分）＋指定質問（各 3 分）

各セッションの司会（座長）は、実行委員会のサポートグループのメンバーが務める。

【問題提起】劉傑先生

【研究発表】

日本	橋本 雄	Hashimoto Yu	北海道大学	蒙古襲来絵詞を読みとく
日本	向 正樹	Mukai Masaki	同志社大学	モンゴル帝国と火薬兵器
日本	四日市康博	Yokkaichi Yasuhiro	昭和女子大学	モンゴル・インパクトの一環としての「モンゴル襲来」
韓国	金 甫桃	Kim Bo-Kwang	嘉泉大学	日本遠征をめぐる高麗忠烈王の政治的狙い
韓国	李 命美	Lee Myung-Mi	ソウル大学	対蒙戦争・講和の過程と高麗の政権をめぐる環境の変化
韓国	趙 阮	Cho Won	漢陽大学	14 世紀におけるモンゴル帝国の食文化の高麗への流入と変化
中国	孫 衛国	Sun Weiguo	南開大学	朝鮮王朝が編纂した高麗史書にみえる元の日本侵攻に関する叙述
中国	張 佳	Zhang Jia	復旦大学	「深簷胡帽」考：蒙元とその後の時代における

				女真族帽子の盛衰史
内モンゴル	チョグト 朝克图	Borjigen Chogt	内蒙古大学	アミルアルホンと彼がホラーサーンなどの地域 において行った2回の戸籍調査について
内モンゴル	エルデニバートル 额尔敦巴特尔	Eerdunbateer	内蒙古大学	モンゴル帝国時代のモンゴル人の命名習慣に関 する一考察
モンゴル国	チェリンドルジ	Tsegmed Tserendorj	社会科学院歴 史研究所	北元と高麗との関係に対する考察・禍王時代の 関係を中心に

・日本人の若手中堅日本史研究者を5名程度招待。特定の論文ではなく自由に討論。交通費と滞在費は渥美財団が全額補助。2名にセッションの座長をお願いする。同様に韓国人の若手中堅韓国史研究者も招待する。無理のない範囲で論文の校正をお願いする。

村和明（三井文庫）、山内晋次（神戸女子大学）、榎本渉（国際日本文化研究センター）、佐藤雄基（立教大学）、荒木和憲（国立歴史民俗博物館）、貴田潔（静岡大学）、崔永昌（国立晋州博物館）、韓承勲（高麗大学）

○8月9日（水） 午前：総合セッション（総括と自由討論）

司会進行：劉傑

論点整理：趙珖

討論（日中韓モから各1名が発問、その後自由討論）

総括：三谷

午後：蒙古襲来博物館や遺跡を見学（発表者と実行委員は全員参加）

○8月10日（木）朝：発表者と同時通訳は解散。

午前：実行委員（コアメンバーとサポートグループ）は会議、その後に解散。

■実行委員会

①コアメンバー

葛兆光（復旦大学）、趙珖（国史編纂委員会）、三谷博（跡見女子学園大学）、劉傑（早稲田大学）

②サポートグループ

李恩民（桜美林大学）、徐静波（復旦大学）、彭浩（大阪市立大学）、ナヒヤ（内蒙古大学）

金範洙（東京学芸大学）、金キョンテ（高麗大学）、鄭淳一（高麗大学、ただし会議は不参加）

③同時通訳（できるだけ同じ人をお願いする）

日本語⇄中国語：丁莉（北京大学）、宋剛（北京外国語大学）

日本語⇄韓国語：李ヘリ（韓国外国語大学）、安ヨンヒ（ソウル外国語大学院大学）

中国語⇄韓国語：李金花（フリーランス）、朴賢（フリーランス）

④事務局（渥美財団）

今西淳子、角田英一、本多康子、長井亜弓（日本語レポート編集）

通訳等補助：孫軍悦（明治大学）、朱琳（東北大学）、洪性珉（早稲田大学）、全相律（東京大学）、宋晗（東京大学）

■タイムライン

12月末までに発表者を確定。

1月末までに演題、発表要旨、略歴の提出。

4月末までにフルペーパー（5～10ページ）の提出。

6月中旬までに翻訳。

7月上旬に参加者に資料を送付。予稿集の簡易印刷。

8月7日～10日円卓会議

8月末まで論文の修正受付

年度内にレポート（論文集）の編集と発行

■その他

・オブザーバーとして、自費参加も認める。宿舍・食事・見学などは渥美財団が一緒に手配し、参加費4万円を徴収する。5名程度まで。

陶韓焌（復旦大学）

・8日の研究発表と9日午前中の総合討論は一般公開。